満願寺の木造菩薩立像について

大澤　慶子（文星芸術大学）

満願寺には見上げるばかりに大きく、重量感あふれる菩薩立像と地蔵菩薩立像が安置されています (図1)。前者は像高 224.2㎝、髪際高が 186.7㎝、後者は像高 203,7㎝、髪際高 185.5㎝、どっしりした体軀、大きな顎と厳しいまなざしに圧倒されます。

菩薩像は髻を高く結い、上半身に条帛と天衣を懸け、下半身に裙と膝までの長さの腰布を着け、左手をあげて蓮茎を執り、右膝を緩め腰を左に捻ります。この姿は、運慶（？ -1223）の文治５年（1189）横須賀・浄楽寺阿弥陀三尊両脇侍像とよく似ています。しかし、横から見た胸や腹部のボリュームたっぷりの体つきは、彼の像を凌駕し、他の同時代像に類をみません。いったいこのお像は、いつ、だれがどのような事情で造ったのでしょうか。

地蔵菩薩像も同様の作風ですが菩薩像をさらに詳しく見てみましょう。注目される点が３つあります。

ひとつ目は着衣表現です。左肩から懸かる条帛は、膨らんだ腹にのせるように少し狭めて表します。この形は浄楽寺像によく似て、このほか文治２年（1186）静岡・願成就院不動明王像、正治３年（1201）岡崎・滝山寺聖観音・梵天像などの運慶作品に確認できます。しかし、浄楽寺像に近似し運慶の可能性も高い京都・清水寺伝観音菩薩・勢至菩薩像や、運慶周辺の宗慶（建久７年（1196）作埼玉・保寧寺阿弥陀三尊像）や実慶作（承元 10 年〔1210〕静岡・修禅寺大日如来像や建仁２年〔1202〕頃の阿弥陀三尊像〈かんなみ仏の里美術館〉）の脇侍像にも見られません。運慶の作品以外ではこの像が確認できる希少な例なのです。

一方で、満願寺像の膝までの腰布を着ける形は、先の浄楽寺像や清水寺像だけでなく、快慶作例にもみられます。運慶作例が襞を写実的にあらわすのと違い、満願寺像は襞を左右対称に、きわめて形式的にあらわします。これは快慶の益子・地蔵院、兵庫・浄土寺の阿弥陀三尊像脇侍像など建久年間の作例に共通します。

二つ目は、髻の形です。頭髪の表現は地髪部、髻ともに毛筋彫りで、髻のみ束ね目をあらわします。髻は下元結を毛束で結い、上元結は紐二条、その上に花弁五条の形に結い目をあらわします。正面や横から見ると、安元元年（1174）の運慶の円成寺像をはじめとする慶派の大日如来像や、浄楽寺像と同年の快慶作ボストン弥勒菩薩像に通じます。しかし、後部は長さの異なる４束を上から段々に垂らす形で（図２)、円成寺像など、後ろで左右に振り分けて結う形とは異なります。慶派の菩薩像の髻の形は、奈良仏師の康助と推定される仁平元年（1154）奈良・長岳寺像をはじめ、髻を上下二段に結うのが通例です。本像の形式は、確認できる鎌倉時代前期の作品には類例が見つかりません。

三つ目は臂釧の形です（図３)。立体的で重厚なつくりが、鎌倉・永福寺出土の荘厳具の飾金具（図５）と共通することが注目されてきました。永福寺は建久３年（1192）に二階堂、続いて阿弥陀堂、薬師堂が建立され、仏像は運慶が造立した可能性が指摘されています。

満願寺像臂釧の基本帯は、上から紐・連珠・紐・単弁の蓮華花弁を連ねる列弁で構成されます。側面の飾金具は、単弁八葉蓮華文の左右に半切菊花文、その外側に透かし彫りの如意形の飾りを配します。上下方部中央から左右に渦を巻く雲文を配し、その先に火炎宝珠形、さらにその先に珠文、上部ではさらにその上に台座に乗る宝珠形をあらわします。基本帯上下方部には、それぞれ左右から蕨手状の飛雲文を配します。

臂釧の意匠については密教図像を典拠とすることが指摘されています。図像では京都・醍醐寺大日金輪像などに単弁蓮華文や単弁を列状に配する臂釧などが確認され、運慶の円成寺大日如来像の胸飾り、運慶作の可能性が高い半蔵門ミュージアム大日如来像〈建久４年（1193）旧足利・樺崎寺像〉の天冠台飾り、足利・光得寺大日如来像〈建久 10 年（1199）頃か〉台座框座飾金具、滝山寺聖観音像の宝冠などに単弁蓮華文が見いだされます。ここで注意されるのは、半蔵門ミュージアム像や光得寺像では単弁八葉蓮華文、円成寺像と滝山寺聖観音像宝冠では、単弁十葉や十一葉の蓮華文を使用する点です。運慶の建久年間の作品に単弁八葉蓮華文の使用が確認されるのは満願寺像の年代を考える上で注視されます。ちなみに永福寺出土の飾金具は複弁八葉蓮華文で、同寺の創建当初の軒丸瓦にも同じ意匠がみられます。

以上の特徴と、満願寺の創建と歴史をあわせ、造像時期について考えてみましょう。

満願寺の創建に関しては、寿永３年（1184）三浦

義明（1092-1184）の末子佐原十郎義連（？―1207以前）創建説と、建久５年（1194）に頼朝が三浦義明供養のため、三浦矢部郷内に一堂を建立（『吾妻鏡』）という記事に充てる説があります。後者の説は、頼朝が文治５年（1189）に発願した鎌倉・永福寺との関連において注目されています。永福寺は建久３年（1192）に二階堂、翌４年に阿弥陀堂が供養され、翌年供養の薬師堂像には北条政子の願意により周丈六薬師如来像、八尺日光・月光菩薩像、六尺不動明王・毘沙門天像、等身十二神将が安置されており（「鎌蔵薬師堂供養表白」国立歴史民俗博物館本『転法輪鈔』）、満願寺像が周八尺に相当することから、永福寺像と同規模の運慶工房による造像との見方があります。つまり、ひときわ大きな満願寺像の造立背景に将軍家の関与を想定する解釈です。

永福寺の立体的な飾金具の類似や、政子寄進という横須賀・曹源寺の十二神将像（『新編相模国風土記稿』）を永福寺薬師堂像模刻像と考える説も、これを補強します。

満願寺像の造像はいつ頃と考えられるでしょうか。運慶の玉眼使用には、尊像による採否がありました。文治５年（1189）年の浄楽寺像では玉眼を使用せず、建久４年（1193）半蔵門ミュージアム像では玉眼を使用します。同時期の永福寺像も玉眼であった可能性が高いでしょう。これを経て宗慶や実慶など周辺仏師の間で玉眼使用が広まり、満願寺像もこうした中で製作されたことが推測されます。飾金具の意匠から、運慶が単弁八葉蓮華文を使用した、建久４年（1193）の半蔵門ミュージアム像、建久10年（1199）頃の光得寺像の影響を考えることができ、正治３年（1201）滝山寺像以前に推定できるかもしれません。

作者は浄楽寺像の像内銘札「小仏師十人」に記される、近しく運慶に接し、同時に快慶作品をも参照することができた仏師だったのではないでしょうか。

【挿図出典】

図１～３は、東北大学大学院文学研究科東洋・日本美術史研究室編『東日本に分布する宗教彫像の基礎的調査研究―古代から中世への変容を軸に』2010

【参考文献】

浅見龍介「満願寺蔵　菩薩立像・地蔵菩薩立像」（『国華』1287）2003
神奈川県立金沢文庫『特別展霊験仏―鎌倉人の信仰世界―』2006
東北大学大学院文学研究科東洋・日本美術史研究室編『東日本に分布する宗教彫像の基礎的調査研究―古代から中世への変容を軸に』2010
三本周作「鎌倉時代前・中期における仏像の金属製荘厳具―意匠形式の分類と制作事情を中心に―」（『仏教藝術』313）2010
奥健夫「曹源寺十二神将像小考」（『Museum』668) 2017
横須賀美術館・神奈川県立金沢文庫『運慶　鎌倉幕府と三浦一族』2022
山本勉「永福寺と運慶」（神奈川県立歴史博物館『源頼朝が愛した幻の大寺院 永福寺と鎌倉御家人― 荘厳される鎌倉幕府とそのひろがり―』）2022
渡邊浩貴「三浦佐原一族の本拠と造寺活動―満願寺出土中世瓦群との関連から―」（神奈川県立歴史博物館『総合研究岩戸満願寺の研究―三浦半島における鎌倉時代寺院の瓦―』）2023
三本周作「快慶作品における金属製荘厳具について―仏師と金工をめぐる一試論―」（奈良国立博物館『仏師快慶の研究』）2023

【図１】 満願寺地蔵菩薩立像・菩薩立像

【図２】 満願寺菩薩像　髻後部

【図３】 満願寺菩薩像　臂釧

【図４】 永福寺出土荘厳具飾金